

# 井口 洋夫 元所長逝去



平成26年3月20日 永眠 享年87

井口先生は、赤松先生、長倉先生とともに1975年の研究所創設以前の準備段階から関わられ、主幹教授、研究所長を経て、岡崎共同研究機構長を退官される1995年まで20年以上にわたり、新しい理想形の研究所を作り上げるという困難な事業を完遂されました。さらに2004年の自然科学研究機構の創設にも貢献されました。いつも穏やかでにこやかに、そして力強く、身を粉にして献身されているお姿は、私たちに新しい学問を育てることの難しさ、それを乗り越える意思と行いの大切さを教えて下さいました。現在まで数百名もの研究者が研究所から巣立ち全国で活躍しています。

井口先生のご貢献に対して心より敬意を表するとともに、生前、皆様から賜りましたご厚誼に対し深く感謝申し上げます。

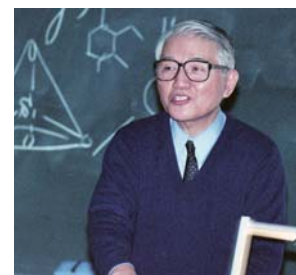
分子科学研究所長 大峯 巖

## 略歴

昭和 2年2月3日 広島県広島市段原にて出生  
 昭和23年 東京大学理学部化学科卒業  
 昭和25年 東京大学理学部大学院修士課程修了  
 昭和25年 東京大学理学部助手  
 昭和30年 ラムゼーフェロー  
 ～昭和32年 英国ノッティンガム大学留学、Ph.D  
 昭和34年 東京大学理学部助教授  
 昭和42年 東京大学教授（東京大学物性研究所）  
 昭和49年 分子科学研究所創設準備室長  
 昭和50年 分子科学研究所教授  
 昭和62年 分子科学研究所長  
 平成 5年 岡崎国立共同研究機構長  
 平成 8年 宇宙開発事業団宇宙環境利用研究システム長  
 平成 8年（財）国際高等研究所副所長  
 平成15年 宇宙航空研究開発機構顧問  
 平成16年（財）井上科学財団理事長  
 平成18年（財）日本宇宙フォーラム会長  
 平成20年（財）日本宇宙フォーラム顧問  
 平成21年（社）学士会理事長  
 平成21年（公財）豊田理化学研究所長

## 栄誉

昭和40年 日本学士院賞  
 昭和53年 日本化学会賞  
 平成元年 藤原賞  
 平成 6年 文化功労者  
 平成13年 文化勲章  
 平成19年 京都賞  
 昭和62年 東京大学名誉教授  
 平成 5年 中国科学院 化学研究所名誉教授  
 平成 5年 北京大学名誉教授  
 平成 6年 総合研究大学院大学名誉教授  
 平成 7年 分子科学研究所名誉教授  
 平成 6年 日本化学会会長  
 平成 6年 日本放射光学会会長  
 平成 8年 日本学士院会員  
 平成12年 中国科学院外籍院士



## Memory of Inokuchi sensei    Ian Munro (元英国Daresbury研究所長)

Inokuchi sensei played an outstandingly important role in scientific and research relations between Japan and the UK in the important area of the Molecular Sciences, often when linked with synchrotron radiation and laser research. His own research in Nottingham (UK) from 1955/6 for three years laid the foundation for several generations of researchers moving between Japan and the UK. His friendships with Prof Dan Eley in Nottingham, who was first person to study organic conductors (I think) and supervisor of his Ph.D. work, with Brocklehurst, Cundall, and especially with Porter in Sheffield (later to receive Nobel prize for his photochemistry), with Sir Geoffrey Allen, Director of research in Unilever and later Chairman of the UK Science Research Council led directly to the creation of a Memorandum of Understanding in the 1980s which was recognised by the Minister for Science for each country with Key Persons H. Inokuchi (Japan) and I. Munro (UK). This Agreement embraced many different Universities and various research Institutes in the UK and in Japan. Some of the collaborations established by him then still remain active today some forty years later! He was a man of considerable personal charm with many, many friends in the UK.

On a personal note I wish to add that he enjoyed visits to my farm in England with his son on two occasions but in Okazaki in 1998 he played a vital role by helping minimise the consequences to me of a massive, life threatening, brain haemorrhage, while I was working in IMS Okazaki in 1998, through the immediate provision of first class medical treatment.

A truly great man who will be much missed and long remembered.

## 井口先生の岡崎における生活の相棒「スバルREX」    丸山 有成 (分子科学研究所名誉教授)

井口洋夫先生は、岡崎の地において世界に冠たる分子科学研究所の設立、およびその後の運営、発展にも尽力され続けてこられました。

このようなご業績を残された井口先生には、微笑ましい相棒がいました。それは、長きにわたる岡崎での生活の足となっていたミニカー「スバルREX」です。この度、「井口先生との思い出」についての執筆の依頼をいただいたとき、それこそ挙げだしたら切りのない中で真っ先に思い出されたのは、このREXのエピソードでした。いわゆる軽自動車である“小さな”REXと、井口先生の“大きな”ご足跡は、そのスケールこそ釣り合いに思われますが、その実、やはり両者には魅かれあう共通点があったのだなあ、と改めて思い返しているところです。

先生は、岡崎での私的な交通手段としてはもちろん、一つの息抜きとしてもREXの運転を楽しんでおられました。先生はドライブも非常にお好きでしたので、REXは気の合う相棒だったと思います。この車のことは、おそらく分子研を訪問した内外の研究者の何人かの記憶にも残っていることでしょう。先生は、体格の大きい海外のゲストの方も、その小さな車内空間に“押し込んで”、近隣を案内されていたことをよく思い出します。私自身も、当時このREXに乗せていただいて、井口先生と岡崎名物の鰻を何度も食べに行ったものです。

この車は、その造りこそ小さいのですが、さすがに元<航空機・零戦グループ>の伝統を受け継ぐメーカーが手掛けただけあって、独創的な設計理念によって造られた車として高く評価されておりました。そうした部分に、井口先生は共感をされていたのでしょう。REXに深い愛着を抱いておられ、我々にもよくその素晴らしさを話して下さいました。

そして、先生が岡崎を去られる時、このREXは、その部品の全てを入れ替えた新品モデルとして、その製造所である群馬県太田市にある富士重工業の社員のための技術資料館に陳列されたとの事です。これらのエピソードは、少し大きざに言えば、井口先生が生涯を通じて取り組んでおられた創造的なくものづくりの精神の一断面を垣間見せるものとして、私の胸に去来する懐かしい思い出です。

井口洋夫先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



## UVSORの井口先生 渡邊 誠 (東北大学名誉教授)

井口洋夫先生がこの3月にお亡くなりになったこと、小杉さんから連絡をいただくまで存じませんでした。全く残念です。今年も年賀状を頂いておりましたのに。

井口先生は極端紫外光実験施設 (UVSOR) の計画段階からの責任者でした。先生は東大物性研ご在職中から、ご自身が開拓された有機半導体の分野に必須の電子構造の研究のため、真空紫外分光、光電子分光の研究にも取り組んでおられ、また分子研創設準備室長を務めておられました。創設準備会議では、国立大学共同利用機関として放射光施設を備えようとの提案がなされました。これに対して、放射光施設は予算がかかり他の設備に必要な費用を圧迫するのではないかと危惧する声もあったそうですが、実際にはそれは杞憂だったと思われます。先生は化学の分光学的研究を中心に据えたものを作るべく、この計画の放射光設備をChemical Machineと呼んでおられ、計画推進のための国際シンポジウムなども開催されました。その頃すでにX線まで利用できるPhoton Factoryの計画が進行していたので、極端紫外光専用のものと考えられ、UVSORと名づけられました。分子研の部門や付属施設は、初代所長の赤松先生のもとで年次計画にそって創設されてゆきました。当初から放射光施設の概算要求も出ていたそうですが、井口先生は放射光施設は分子研として鍋釜がそろってからだとおっしゃっていました。建設予定地は旧機器センター棟 (現レーザーセンター棟) の南の敷地で、全体を地下に収納し、そこでできる最大規模のものを作るように指示されました。地上部はテニスコートにとされました。概算要求の内示があったのは分子研創設後5年目 (1979年) の暮れで、写真は内示の直後に建設予定地で撮った所内メンバーの集合写真です。UVSORは多くの研究者に利用されなければならないと同時に、所内でも利用研究を強力に推進する必要があるというのが先生の持論でした。また施設発足までは、装置開発室が技術課と連携して建設を担うようにとのお考えでした。写真には所内メンバーとして先生が主宰されていた分子集団研究系のメンバーと、装置開発室の私と、技術課の内田さんが写っています。予算が通っても浮かれないように「勝って兜の緒を締めよ」との格言に従って、紙の兜を折り、それをかぶって記念撮影をしました。この写真を撮ることは先生が発案され、カメラも先生のものでした。先生は写真を撮るのが大好きで、いろいろな場面で写真を撮ってみんなに配っておられました。その後、春日さんたちが赴任され、1982年4月にはUVSOR施設が装置開発室から分かれて発足し、先生は初代施設長に就任されました。試運転に成功したのは1983年11月でした。先生は伊豆のどこかの灯台でご覧になった「初点」という言葉と、試運転成功の日付を、第二代所長の長倉先生にお願いして書いて頂き、それをプレートにしてコントロールパネルに貼られました。共同利用の開始は1985年4月でした。井口グループのビームラインは光電子分光のビームラインで、当時若手の関さん (故人) が中心となって立ち上げ、多くの研究者と共同して有機半導体に関する数多くの有意義な成果をあげていきました。

UVSORでも先生は、分子研全体の国際交流の一環として、多くの訪問者を海外から受け入れ、こちらからも派遣されました。日英協力ではDaresbury研究所との交流が中心でした。先方のキーパーソンであった Munroさんに先生の訃報を伝えたところ、非常に残念がっていました。Munroさんが先生に初めて会ったのは、先生がイギリス留学しておられる時だったそうです。先生は、UVSOR完成後、放射光利用研究関係では規模の大きい真空紫外光物理国際会議の国際諮問委員をされ、また1994年には日本放射光学会の会長を務められました。

先生は心配りの行き届いた方で、UVSORは他の設備に比べて予算規模が大きいですが、驕ってはならない、愛されるUVSORにならなければならないとおっしゃっていました。大乘的という言葉も時々使っておられました。京都賞を受賞されたときのご講演で、お祖父さまから仏教の影響を受けたとお話になり、なるほどと思いました。予算に関しては、使用目的・方法を聞かれたら、すぐにきちっとした答えを書類として見せられるようにと指示されていました。そして先生は結構面白い方でした。一度、車に乗せてもらったことがあります。車が2台駐車していました。1台は大きく、もう1台は小さかったです。私は当然のこととして大きい方に向かいましたが、先生は小さい方に向かわれました。それは先生の愛車、スバルREXでした。この車を修理工場にもっていくと、古くて配線がよく分かるので、ベテランの修理工が若い修理工を呼んで「よく見るように」といつも指導するのだとおっしゃり、一見自慢しておられるふうでしたが、照れておられたようです。

先生の温かいお人柄を偲びつつ、筆を置きます。



## 井口先生を偲んで 齋藤 軍治 (名城大学農学部)

有機導電体の研究は1940年代後半に形をなし、パイ共有有機化合物が半導体的性質を示すという、主要な論文が相次いで3か所から報告されました<sup>[1-3]</sup>。一つはフタロシアニンや生体系化合物 (Eley<sup>[1]</sup>)、ピオランスロンのような芳香族炭化水素系 (赤松、井口<sup>[2]</sup>、井口先生23才)、次いでシアニン色素系化合物 (Vartanyan<sup>[3]</sup>) です。これらが有機半導体 (井口先生の提案した名称) の幕開けであり、現在の大きな科学技術分野である、有機エレクトロニクス (有機EL、有機太陽電池、有機トランジスター、有機メモリー・スイッチ、生体材料エレクトロニクス) へ展開しています。井口先生は、有機分子の集合体をどのように配列制御すると高移動度を得ることができ、それにはどのような分子構造・電子状態が適しているかという洞察に優れ、早い時期にファスナー効果 (井口先生の提案名称 1986) や、ヘテロ原子間接触 (1987) を用いた高移動度結晶を提案され、現在の有機EL、TFT、電荷移動型太陽電池の基礎設計指針を築いています。また、Mulliken電荷移動相互作用を利用した高導電性有機錯体 (松永先生とのペリレン・臭素錯体、1954が源点) から有機金属 (FerrarisらのTTF・TCNQなど) の流れをしっかりと把握し、有機物に金属性を与えるための分子およびその集合体の必要条件を明確にし、TMTSF系に始まる有機超伝導体の中で2次元導体・2次元超伝導体BEDT-TT系錯体の研究を牽引されました。

井口先生は物質開発において、基本概念の提案、全体像の進む方向付けに非常に優れた感・観・勘を持つ研究者です。若い時期にEley先生の研究室で博士研究員をされ、バイオ材料に興味を抱かれたのでしょうか。Eley先生はタンパク質、アミノ酸など数多くの生体物質の電導研究をされておりますが、井口先生の取り上げたチトクロムC<sub>3</sub>+酸化還元酵素ヒドロゲナーゼ+水素の3元系はまことに興味をそそるものです。チトクロムC<sub>3</sub>分子中の4個の鉄の価数変動に対応して室温近傍で極めて高い導電性を示すことは、その伝導機構が、上記の金属的有機物や有機超伝導体の枠を超えたものであります。脇から実験を眺めるのみでしたが、単結晶で研究ができれば新規概念の創出に向けた高度情報が得られる材料でしょう。

Eley研究室で興味を刺激されたのか出発点は定かではありませんが、アルカリ金属・芳香族炭化水素を触媒としたオルト・パラ水素の変換実験もまことに興味深いものです。触媒の高不安定性のためか、これらの実験は途切れましたが、他の研究者により、触媒機能ではなく超伝導機能へ展開した点は目を見張るものがあります。

井口先生がもっとも興味を引いた物質は、若い時から対象としていたグラファイト、芳香族炭化水素でしょう。テトラベンゾペンタセンの蒸着膜を高真空釜内で作成し、移動度測定をお手伝いしたことがありますが、非常に忍耐のいる実験でした。試料をHPLCでチェックすると超微量の不純物が混入しており、純品試料作成という仕事に戻り、結果を出せずじまいでした。その後、いくつかの研究室から、芳香族炭化水素で高移動度の報告がありますが、今もって不純物、欠陥、電極との接合部分のdisorderが明確に記載されていないものがほとんどで、移動度の数値が一人歩きしている感じがあります。

私は、創設直後の分子科学研究所において客員部門の助手として5年間、井口先生にお世話になりました。助手に採用されたのが35歳を過ぎており、将来きちんと助教授になり分子研を出ることが可能なのかというのが先生の気がかりな点だったでしょう。井口先生の慣れ親しんだテーマでの仕事で論文を稼ぎ、若手助手を売り出すというのが簡単ですが、井口先生の若手育成法は異なりました。井口研出身者でない若い研究者には、これまでの研究背景に基づいた若手からの提案テーマにいくつかの示唆を与えるという内容で、かなり自由な研究をさせていただきました。先生から多くのことを学ばせて頂き、まことに感謝いたします。特に、若いうちに教科書的な書物を作る (名著「有機半導体 (絶版)」は先生37才のとき) 点は感慨深いものでした。

井口洋夫先生のご冥福を心からお祈りいたします。

[1] D. D. Eley, *Nature*, **162**, 819 (1948).

[2] H. Akamatu, H. Inokuchi, *J. Chem. Phys.*, **18**, 810-811 (1950).

[3] A. T. Vartanyan, *Zhru. Fhim. Khim.*, **24**, 1361-1370 (1950).

## 井口洋夫先生を偲んで 佐藤 直樹 (京都大学化学研究所)

本郷の化学科4年生になり大学院進学が視野に入った頃、当時は六本木にあった物性研究所の(PMDRに関する)短期研究会の開催を知り、ノコノコと出掛けて行きました。当然のことながら理解には程遠い状況でしたが、一つの分子よりはるその集合体に興味をもち始めていて、井口先生のお名前も存じ上げていましたし、物性研自体にも関心があったので、「ついでに見てきたら？」との先輩の勧めが後押しにもなり、閉会後に井口研究室ほか二つの研究室を見学させていただきました。井口先生はご不在だったのですが、<sup>敬</sup>関一彦さんや城谷一民さんに伺った研究室@物性研の研究内容だけでなく、その雰囲気や環境にも心惹かれ、院入試の第一志望とすることを決めました。井口先生に初めてお目に掛かったのは入試の面接試験のときで、記憶に間違いなければ、先生はその折とくに何もお尋ねにならず、ただニコニコしていらっしやうに思います。唯一の質問は長倉三郎先生からいただき、それには納得のゆく回答はできなかったのですが、とにかく志望どおり昭和49(1974)年4月から井口研に在籍させていただけることになりました。そのときは(間もなく井口先生が分子研創設に伴い東大から異動されるため)井口研最後の大学院生になるとは知りませんでした。以来、ほぼ40年の永きにわたり師としてご指導を仰ぐことになった次第です。

4年生のとき公務員試験に受かっていたことも少しは意味があって、修士課程修了とともに井口先生が技官に採ってくださることになり、愛知教育大学の旧図書館棟への仮住まいから始まった分子研に8年間お世話になりました。当時の分子集団研究系物性化学研究部門の半分+ $\alpha$ は、物性研の界面物性研究部門の半分(もう半分は理論の菅野暁先生のグループ)がスリムになって引っ越してきた感じで、正直のところ大学院の延長のような気分から始まって研究に没頭できたように思います。分子研全体がそんな雰囲気にあふれた梁山泊のようで、その中心に、頻繁な出張を除けば単身赴任されて何時でも研究室におられた井口先生がいらっしやいました。後に所長、そして岡崎国立共同研究機構長をお務めになるのが当然と誰しもが思っていたように、先生は当時から常に「超」のつくご多忙でしたが、研究室のコロキウムにはほぼ欠かさずお越しになり、鋭い指摘や我々が思いもつかないようなご発想で一同をうならせることもしばしばでした。

昭和59(1984)年に分子研から“放校”となり、以来二回の異動を経て平成4(1992)年に現職に就任しました。その間も、またその後も、有形無形さまざまな形で先生のご指導ご高配に与ってきたことは言うまでもありません。なお、現職(大学附置研究所)に応募した際、実は少し遅れて別の大学(学部)にも書類を送っていたのですが、順序どおり現職が先に決まったため後者の応募を撤回しました。それを井口先生にご報告した際、異動の決定についてはもちろん慶んでくださいましたが、「研究所と学部は学生指導の点で違いがありうると予め言い置くべきでしたかね？」と若干反省めいたお言葉も頂きました。そのときは能天気になだお聞きしましたが、以後、その意味がよく判るようになり、それはやはり大学附置研から直轄研と、研究所ひとすじに進まれた先生ご自身のお気持ちではなかったかと、今は推量しています(この点、そろそろ直接お尋ねしてみようかと思っていたのですが)。

井口先生は常に広い分野で新たな行動を起こされましたが、国際活動も例外ではありません。「Conduction and Photoconduction in Organic Solids and Related Phenomena」と題する日中二国間シンポジウムを、中国側の参加者全員がまだ人民服を着用していた1983年に、銭人元先生と共に北京で開始されたのも先生です。その第1回に私も日本側の最年少で参加させていただきました。以来、3年ごとの交互開催となり、昨年秋には長春で第11回が開かれました。2、4、6、8回は井口先生から丸山有成先生、薬師久彌先生が分子研で開いてくださったのですが、平成22(2010)年の第10回は、国内開催で初めて岡崎を離れ、私が京都で開催させていただくことになり、井口先生のご参加を賜って中国側の参加者も大喜びでした。

以上に記させていただいたことは、井口先生に係る私の記憶のごく一部に過ぎません。しかも、脈絡なくふと思ひ浮かんだことを書き留めただけで、もっと大事なあるいは深い思い出が抜け落ちている気がします。でも、網羅的に記載するなど不可能ですし、私の心の中には、あの温かなお顔の先生が今でも常にいらっしやいますので、その必要もないと思っています。

でも、毎秋一回は必ずお目に掛かっていたのにそれが叶わなくなったことの意味を、今後、日を追って痛感するようになるでしょう。井口先生のご冥福とともに、願わくは引き続き天啓として、ご指導ご鞭撻を賜りますよう衷心より祈念させていただきます。

## 井口さんの「目の下のたんこぶ」 細矢 治夫（お茶の水女子大学名誉教授）

巨星井口洋夫があっけなく逝ってしまわれた。7月9日のお別れの会に出席したが、最期の時期の井口さんの様子など、私の知りたい情報がほとんど手に入らなかったのが残念であった。

私は東大の理学部化学科で井口さんの11年後輩になる。学部3年の物理化学実験では、何人かの助手の先生方のお一人として、お世話になったはずなのに、その時の井口さんのことは何も覚えていない。ところが、あちらは私をかなり詳しく認識されていたらしい。それは、卒業後20年以上も経ってから突然、井口さんからこんな言葉を聞かされて分かったことなのだ。

「大昔、細矢さんが3年生の頃、頭がおかしいのではないかということが当時の助手達の間で話題になった。というのは、物理化学実験の『細矢・X』の連名のレポートの中身が時々めっちゃめっちゃだったので、この中のどちらかが狂っている。でも、細矢は野球でピッチャーをやっているから、犯人はXに違いないということになった。」という笑い話でその時は終わった。

かなり以前に故人になったX君には申しわけないのだが、それは事実なのだ。でも、当時の私は彼以上に脳天気で、相棒の頭の中が混乱していたことも気がつかず、また彼がどんなレポートを書いたかも全然気にせずまかせっきりにして遊びほうけていたのである。

実は、私と井口さんとの御縁は、そのあと直ぐ、私の修士時代からずっと続いて来たのである。ところがどういうわけか、こんな身分関係なのに、私は「井口先生」と一度も言ったことがない。何時も「井口さん」で済まして来てしまった。あちらも何時も「細矢さん」で通されて、「細矢君」と呼び捨てにされた記憶がない。

そんなに私は井口さんに可愛がられた存在だったのだろうか。さにあらず、私は彼の数少ない「目の下のたんこぶ」役をずっと続けて来た悪者なのだ。それなのに、このような特別扱い。これが、井口さんの大人（たいじん）たる所以なのだ。

私は1959年に、できたての東大物性研の長倉研の最初の学生の一人として修士1年になった。井口さんはその同じ年に理学部の助教授になり、翌年に物性研の助教授として六本木のキャンパスに来られた。物性研の住人としては私の方が1年先輩である。

当時の物性研の化学部門は、理学部の長倉・井口と工学部の塩谷の三つの研究室しかなかった。周りは全て物理の人達に囲まれていたのである。ということからか、長倉・井口の両研究室の学生達は、先生同士の緊密な関係とは逆に、身近な喧嘩相手だった。その間、井口さんは子供の喧嘩には一度も首を突っ込まれなかった、という記憶がある。

ところが、私が1年間のポストドク修行を米国ミシガン大のプラットのところで終えて、1969年にお茶大の理学部化学科の助教授になってからは急変する。分子研構想が現実味を帯び始め、分子構造総合討論会の参加メンバーを中心に分子科学研究会ができ、更に分子科学研究所小委員会が設立された。そして、どういうわけか、若手の代表の正式メンバーとして、お茶大の細矢と都立大の藤山の両助教授が、大人と子供をつなぐ役を背負わされたのである。この両名は、当時としては珍しく、上に教授という重しが乗っかっていない、その代わりに助手も充てがわれない、という極めて気楽な身分だった。

この小委員会の委員長は森野米三、副に赤松秀雄大先生。でも実質的には長倉三郎先生がリード役、その番頭役が井口さんだった。他の委員として、化学からは福井謙一、久保昌二、島内武彦、田中郁三、他数名、物理からも大野公男（所属は北大の化学）、豊沢豊等々の錚々たる方々がおられた。ひよっこの我等2名は、分子研誕生前夜の官学の動き、それに関わる人達の中の生々しい人間関係を目の当たりにするという得難い経験をすることができたのである。そういう荒々しい場の中でも、井口さんは巧みに確実に裏方の役をこなして、重要案件のベクトルがおかしな方向に向かないように努力をされていた。

これらの活動が実を結び、1974年には分子研創設準備室が創設され、井口さんがその室長に選ばれたのである。しかし、この準備室のことは、私は蚊帳の外にいたのでよく分からない。藤山君が井口さんを大いに助けたことは知っている。

そして1975年にいよいよ分子研が創設され、赤松先生が、横浜国立大学の学長職を蹴って分子研の初代所長になられた。私は客員助教授の一人として、分子研の教授会議には毎回出席することになった。そのうちに、なぜか私はその赤松先

生の大層お気に入りの身となってしまったのである。

その役を終えて数年間は分子研との縁は若干途絶えたのだが、1985年、井口さんが第3代の所長になられる2年前の長倉所長の時に、私は運営協議員会委員に選ばれ、その関係で2期4年の人事選考部会委員にも命じられた。

ところがどういうわけか、井口所長の考えにはなじめないことが色々出て来たのである。いくつかの委員会で所長に異を唱えることが多かった。赤松先生に甘やかされたこともあり、私は少々図に乗っていたのかも知れない。井口さんの気に触るような発言もしたと思う。また、分子研以外の問題、つまり教科書や辞書の編纂に関わることでも、井口さんとの食い違いやすれ違いがいくつかあった。しかし、井口さんの私に対する接し方は、終世変わらなかったのである。今にして思えば、全く私の負けである。

でも、一つだけ未だに知りたいことがある。井口さん御愛用の黒表紙の大きめなあの手帳には、私のことや意見がどのように書かれていたのだろうか。いや、全然書かれていなかったかも知れない。

私が不死身と思っていたその井口さんも、遂にあちらの世界へ行かれてしまった。私もいつかはそこでお会いする。そんなに遠い先のことではないだろう。「やあ、ようこそ、細矢さん。」とにこやかに言われた時に、どういう顔をして何と答えるか。井口さんの目の下のたんこぶがどこまで成長しているだろうか。他人が見たら、おかしなことに気をもんでいる今日この頃である。

## 井口洋夫先生追悼——分子研創設当時のこと 吉原 経太郎 (分子科学研究所名誉教授)

井口洋夫先生のことを思い起こしますと、先生の静かで穏やかなお顔しか浮かびません。先生は、常に人をそらさない誠実な態度でお話しされ、しかも他人の立場をよく理解されていました。そのため、どのような人でも本音で先生と会話ができたように思います。談話の名手でした。先生の思い出はあまりにも多く尽きませんが、ここでは分子科学研究所創設当時の先生のご活躍を、知っている範囲で、書かせていただきます。

多くの先人たちの悲願が実って1974年に分子研設立が現実のものになり、東大物性研内に創設準備室が作られ、先生が準備室長になりました。事務官を含めてたった3名で研究所を具体化する重責を担われたわけです。組織づくり、設置場所の決定、予算、文部省との打ち合わせ各種会議の開催などなど、山のような仕事量だったと思われます。

翌1975年4月には岡崎の地で赤松秀雄先生を所長に迎え、分子科学研究所が正式発足しました。岡田修一管理部長を始め、極めて優れた事務官・技官が井口先生を支えました。大学の教授会に相当する創設協力者会議、運営と共同研究の専門委員会(全国の大学教官総勢のべ28名)と人事選考専門委員会(14名)が煩瑣に開催され、また、評議員会(15名、1年後に外国人評議員2名を追加)が開催されました。先生はこれらすべてのキーパーソンとして円滑にまとめられました。

旧愛知教育大の図書館を仮庁舎として、事務室、研究室、ミニ図書館などが作られました。敷地のランドデザイン、建築や設備の設計、宿舍の準備などが先ず大変だったことと思います。地元教育界などへの挨拶なども丁寧に行われました。初年度とは言え、新制度(外国人評議員、外国人招聘研究者、国際研究集会)、2本の特別研究費、技術課(全国で初)や実験室・施設の予算が付いたので、これを具体化するのが大変でした。先生としては猫の手も借りたい状態だったと思います。私は採用内定段階の7月に、まだ発令前でしたが、いくつかの仕事が回ってきました。招聘外国人研究者のお世話、同教授を囲む国際小研究会の開催を始めとして、評議員のH. Gerischer教授(Max-Planck Institut, Fritz-Haber 研究所長)や第1回岡崎コンフェレンスの世話の他、「分子研レターズ」や「分子研リーフレット」(外国人評議員の評議員会での講演の訳)の発刊などがありました。また、研究所施設などの諸規定の制定も、先生のきめ細かなご指導の下でお手伝いしました。先生は現在のさくら保育園の建物に下宿しておられました(秋からは私も同居して合宿状態でした)。

人事選考委員会は東京で開催されました。冬だったと思いますが、国鉄のストライキで、車で行かざるを得ません。赤松所長と廣田栄治教授の4名で夜の東名高速をつつ走ったのも、当時ならではの苦労でした。「全員事故死したら分子研はどうなるやら」などと笑いながら。

先生が特に強調されていたのが、教官・事務官・技官の「3本脚の鼎(かなえ)」体制です。新しい技術課を軸として3者間の人事交流も意図され、「創設の和」を説いておられました。分子研が順調にスタートできたのは井口洋夫先生のまさしく獅子奮迅のご活躍のお陰でした。